

143 林檎の礼拝堂（2023年1月12日）

パリから西に約200キロ、ノルマンディー地方のカンから南へ40キロほどのところに位置するサン=マルタン=ド=ミュー村には、サン=ヴィゴール礼拝堂、通称「林檎の礼拝堂」と呼ばれる礼拝堂があります。静かな小さな村にひっそりと建つ礼拝堂の中に入ると、外観からは想像ができない空間に驚かされます。壁に描かれた林檎の木が目に入り、アートな世界へと導き入れられます。

ここに礼拝堂が建てられたのは、15世紀に遡ると考えられています。19世紀になって荒廃が進んで司祭が去って以降、礼拝堂として使用されなくなりました。そして、建物が危険な状態となったため、1983年に閉鎖されることになりました。村は、礼拝堂の修復を試みましたが、建物は歴史的建造物に指定されておらず、十分な財政支援を受けることができませんでした。しかし、1987年末に田窪恭治さん(1949-)がこの礼拝堂と出会ったことで、礼拝堂の運命が変わりました。田窪さんは、芸術作品としてこの礼拝堂を再生することを決めました。1989年に田窪さんは、家族で近くのファレーズに移住し、地元住民と話し合いを重ねて、廃墟と化した礼拝堂の再生を始めました。



礼拝堂の再生には、11年の年月を要しました。そのほとんどは、老朽化した建物の修復に当てられました。まず、屋根の木組を解体して、傷んだ部材をし補修することから始まりました。田窪さんのアイデアで、屋根瓦には、青、緑、紫、赤、黄、透明のガラスが使われました。礼拝堂内部で天井を見上げると、ステンドグラスのように美しい色の光が差し込みます。礼拝堂の修復が完了した



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

後、内部の壁には林檎の木が描かれました。絵の具を重ねて塗った後に絵の具を削り出すという手法が使われました。林檎の木が描かれたことから、「林檎の礼拝堂」と呼ばれるようになりました。そしてついに、1999 年秋にプロジェクトは完了しました。

このプロジェクトのために、100 社近い日本企業や個人から資金が提供されました。礼拝堂の側面にある鉄の扉（写真右）には、寄付をした人たちの名前が刻まれています。長引く不況に加えて、日本では 1995 年に阪神大震災が発生して資金集めが停滞し、工事期間の延長を余儀なくされましたが、支援者の熱い思いによって実現しました。このプロジェクトは、地元住民の理解を得ながら進められ、ノルマンディー地方の農村の建物の伝統的な外観や天井の木組が残されました。



サン=ヴィゴール礼拝堂は、一人の日本人アーティストの情熱から始まり、多くの人の支援を得て見事に蘇りました。ノルマンディーの小さな村で、日仏文化交流の証として今も訪れる人を温かく迎え入れています。

